

千葉県成田市

# 旧学習院初等科正堂



明治期に東京で建てられた学習院初等科の講堂を移築保存した重要文化財。戦前に成田市に下賜され、現在は千葉県の「房総のむら」で公開されている。西洋建築の意匠と日本の木造技術が調和し、当時の学校建築において数少ない講堂建築である。



正堂

千葉県印旛郡にある「房総のむら」の広大な深い緑に囲まれて、端正な木造洋風建築が佇む。かつて東京・四谷で皇族や華族が学んだ旧学習院初等科正堂だ。1899（明治32）年の竣工から120余年。重要文化財として、今はここ房総の地で静かに時を刻んでいる。

講堂内に一歩足を踏み入れれば、そこには柔らかな静寂が満ちている。窓から差し込む端正な光が織りなす陰影は印象的だ。肉眼では穏やかな光景だが、レンズを通すと、空間に漂う微細な光の粒子が、驚くほど鮮やかな物語を紡ぎ出す。かつてイスタンブールのブルーモスクで見た、祈りの空間を満たす神秘的な光の記憶が蘇る。様式こそ違いますが、神聖な空間を支配する光の静謐さが、私の中で不思議な一本の線につながった。

建物の細部もまたユニークだ。屋根の上で踊る針金のように繊細な鉄の装飾は、どこか異国の風を感じさせる。室内後方に整然と並ぶ見事な列柱は、かつての講堂としての威厳を今に伝えていた。この建物が辿った数奇な運命も興味深い。四谷から成田へ移築され、一時は中学校の体育館として供されていたという。皇室ゆかりの御料牧場があった縁での移設だったが、子どもたちが元気に駆け回っていたという歴史を聞き、その優美な外観に秘められた「タフな美しさ」に改めて驚かされる。

近く、大規模な補修工事などが計画されている。木造建築としての美しさを保ちつつ、未来への安全を確保する。傷みを抱えながらも毅然と立つその姿は、今まさに新たな「タイムトラベル」の準備をしているようでもある。50年、100年後の未来へ。



扉の上部を飾る、華やかな金色の扇形装飾が強く目を引く。この旧学習院初等科正堂は、明治期の「擬洋風建築」を代表する貴重な遺構の一つだ。西洋の建築様式を日本の職人が木造で見事に具現化した意匠の美学が、この緻密な装飾に凝縮されている。120余年の時を超えてなお、空間に皇族の学び舎らしい圧倒的な気品と、揺るぎない威厳を添えている。